

郷土博 通信

No.3

2014 春

当館の「久米通賢資料」が国の重要文化財に指定されました



CONTENTS



■鉄地金銀象嵌獣面紋大刀柄頭	1
■久米通賢資料の重要文化財指定にあたって	2
■展示室紹介	2~4
■飾り大刀の世界	5~6
■定点観想③	7
■郷土博物館のあゆみ(2)	8~9
■鉄地金銀象嵌獣面紋大刀柄頭と荻田元広	10
■第3回公開講座お知らせ	10

てつじ きんぎんそう かんじゅうめん もん た ち つかがしら
鉄地金銀象嵌獣面紋大刀柄頭【香川県指定文化財】(長さ6.3 × 幅3.9 × 厚さ2.2cm)

久米通賢資料の重要文化財指定にあたって

去る3月18日の文部科学省文化審議会において鎌田共済会蔵・郷土博物館保管の久米通賢資料1061点が「久米通賢関係資料」として国の重要文化財(歴史資料)に指定答申されました。これまでも地元香川県や研究者の間ではその重要性が知られていましたが、改めてその価値の高さが認定されたことになります。

久米通賢(栄左衛門)(1780～1841年)は讃岐の生んだ科学者、技術者、塩田開発の事業家として卓越した活動をしました。また天文観測、測量、銃砲の製作・改良、土木工事等においても多くの業績を残しています。本資料は、この久米通賢の事績を物語る最もまとまった資料群として、「19世紀前半における科学的知識の受容と活用の実態を示し、科学技術史研究上に価値が高い」という評価を得ました。

このように久米通賢資料の持つ意義が認知されるに至ったのは、長期にわたり多くの方々が関心を寄せられ、調査・研究が深められたことの賜物と感謝しております。

今後、当郷土博物館としましては従来にも増してこの資料群の保護に意を用いるとともに、調査研究や展示等を通じて久米通賢とその資料の歴史的・学術的意義の一層の周知顕彰に努めていく所存です。さらには資料の全容を広く公開し、研究資料として役立てて頂けるよう、その方策を鋭意考慮しているところです。

なお、4月22日～5月11日に東京国立博物館において「新指定 国宝・重要文化財」として久米通賢資料が展示されます。その後、6月から当館にて指定お披露目の展示を行いますので、皆様のご来館をお待ちいたします。

鎌田共済会郷土博物館

第1展示室

本室には鎌田共済会を設立した鎌田勝太郎の業績の内、坂出村に明治19年(1886)に創立し同26年(1893)に閉校した私立中学校せいせいがかん済々学館と、大正11年(1922)に開設し昭和20年代まで存続した鎌田共済会図書館に関係した資料を展示しています。そのうち、済々学館関係の資料についてご紹介します。



▲生徒履歴書 済々学館 (縦27.3×横19.8×厚6.5cm)

「生徒履歴書」には、明治19年から明治25年までの生徒の履歴書(学業履歴書)が242通綴じられており、これは入学出願時に、「入学願」「在学保証書」とともに提出されたものです。済々学館存続期間の全在学者が394人(『坂出済々学館金蘭志』による)であり、約6割の生徒の学歴資料が残っていることになります。

履歴書の書式は済々学館規則に定められており、住所・姓名・年齢の他、それまでの学歴、学校名・学科・修学年数、また詳しく教を受けた教師の名前や教材の名称、どこまで学び終えたかまで記入することになっていました。生徒は出身地で見ると中讃のみならず香川全域で、他府県の出身者も多くいました。年齢的には満14歳が多く、学歴も私塾のみで教育を受けてきた、小学校を卒業した、あるいは、三野豊田中学予備学校や県立高松中学校が閉校になるまで学んだなど様々です。

この「生徒履歴書」は明治前期の讃岐国の初等教育の実態を明らかにする重要な資料の一つであるといえるでしょう。

(廣瀬 永津子)

第2展示室

第2展示室には大正時代に作製された展示ケースがあり、そこに2枚の板木が展示されています。

1枚は「牛旋激水図」(図1)、もう1枚は「牛旋激水/牛曳碓 一器ニシテ二器ヲ兼タル図」(図2)のタイトルが付けられています。どちらの板木も、久米通賢が大坂難波新地や江戸浅草奥山など繁華な地で行った見世物興業の引札(宣伝用チラシ)を刷った原版です。通賢の行った見世物興業については、江戸時代大坂の様々な出来事を記した年代記ともいえる浜松歌国の『摂陽奇観』巻之四十五に「…大滝を見せる…」と記されており、文化13年(1816)夏、難波新地での興業が評判を呼んだことがわかります。

2枚の板木に彫られた詞書や挿図をみると、「大滝」は、牛を動力とした揚水装置「牛旋激水」を利用して、汲み上げた水を下に落とす、その様子を滝に見立てて「養老滝」と名付け見世物としたものでした。そして、別の機会には「牛旋激水」の仕組みに碓^{つきうす}を組み合わせて、2つの機能を有したより複雑な進化した装置のひな形を作り、見せたようです。また、詞書には通賢が国の基は農業であると考えていたことも述べられています。このことから久米通賢が自らの考えを実践するために、多くの人目に触れる見世物という形をとって揚水装置のアイデアを公開し、それが実用化につながり灌漑装置等として農業の場に導入され役立つことを意図していたことが窺えるのではないのでしょうか。

(廣瀬 永津子)



▲図1 板木「牛旋激水図」江戸時代文化年間
(縦31.0×横42.2cm)



▲図2 板木「牛旋激水/牛曳碓 一器ニシテ二器ヲ兼タル図」江戸時代文化年間
(縦29.6×横42.0cm)



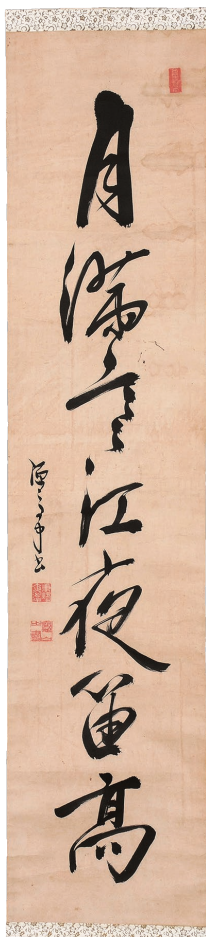
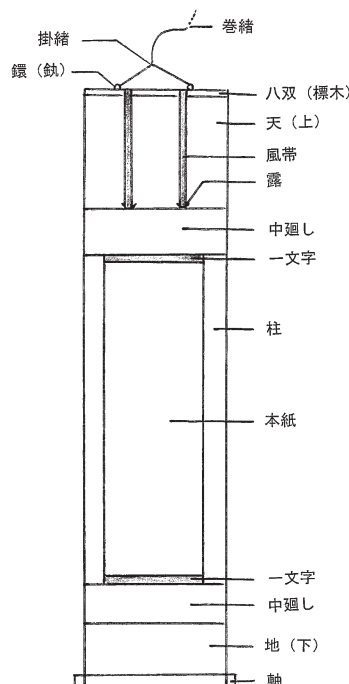
第3展示室 丸亀京極家とその周辺の人びとの書画

丸亀京極家の人びとや、藩士、藩医、文人等の書画をご紹介します。讃岐国は、天正15年(1587)から寛永17年(1640)まで生駒家が一国を治めた後、高松藩と丸亀藩に分かれ、高松藩は松平家、丸亀藩は山崎家、京極家の治世を経て明治を迎えました。丸亀は城を中心として栄え、また金毘羅権現への参詣客が乗下船する港町としても賑わい、文人墨客も輩出しました。

その活躍が今に伝えられる女性たちには、江戸中期に藩主京極高豊の母養性院の侍女として仕え、文筆家としても知られた井上通女、幕末期に尊皇攘夷思想を貫き、漢学者、歌人としても著名で、最晩年に丸亀で過ごした若江薫子などがいました。

■ 掛軸のこと

本室の展示品には掛軸(掛幅装)が多数あります。この装丁は本紙(絵画や書のある料紙や絹地等)を壁などに掛けて観賞するための工夫となされたもので、室町時代頃には現在見るような形態のものが出現し、書院の床の間や茶席などに掛けられます。掛軸を構成する布や紙は、その種類、模様、色合い等の取り合わせ、あるいは本紙の内容に関係づけて選択されることから、表具も観賞の対象となります。本紙の書や絵画とともにご覧下さい。なお上の図は掛軸の各部分名称を示したものです。(吉久 由紀子)

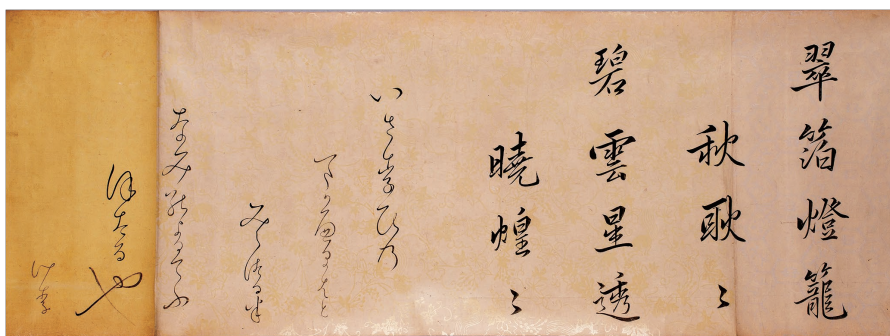


◀ 一行書 京極高中書 (本紙:縦123.5×横27.4cm)

掛軸。「月満寒江夜笛高」は晩唐の詩人羅鄴の七言律詩「秋日懷江上友人」の第四句。

京極高中(1754~1811) 丸亀藩京極家五代藩主

10歳で襲封後、49年間藩主の座にあり、さまざまな困難にも積極的に取り組み、藩政を堅実に行った。主な事績として、寛政6年(1794)の藩校正明館の開設、文化3年(1806)の福島温甫(船溜まり)の築造などがある。



▲ 漢詩和歌書 井上通女筆 (縦27.4×横150.5cm)

卷子本。『新撰朗詠集』から漢詩2首(4句)と和歌2首を、雲母引きの美しい料紙に書写している。上図は一条天皇作漢詩と惟盛作和歌の箇所である。

井上通女(1660~1738)

幼い時より学問を好み、和漢の書を読み、詩歌文筆にも堪能であった。その才能を見出され、天和元年(1681)より9年間、江戸藩邸で養性院に仕えた。江戸へ往く途次を記した『東海紀行』、江戸藩邸での暮らしを記した『江戸日記』、帰国の旅の様子を書き留めた『帰家日記』は、通女の三日記として知られている。また、江戸滞在中には、新井白石や室鳩巢、貝原益軒などの大学者らと交わり、その才は大いに称賛された。

飾り大刀の世界 ―魔よけの獣面(鬼面)紋― 伝・観音寺市母神山古墳群出土の大刀柄頭

第2回公開講座から
千賀 久

はじめに

この柄頭は、郷土博物館に「鉄地金銀象嵌獣面紋大刀柄頭」として所蔵されている資料であり、観音寺市栗井村某古墳出土との伝えがある(註1)。それは、郷土史の先覚者荻田元広氏によって、明治37年(1904)に入手されたものであり、その経緯については先の文献に詳しく記されている。その後、象嵌紋様が確認され、1989年から町田章さんを中心に、奈良国立文化財研究所で研ぎ出しと保存処理が行なわれ、1999年には香川県指定文化財(考古資料)となっている。

まず、「柄頭」の出土地についてふれておく。

観音寺市栗井町には母神山古墳群があり、出土地の候補の一つに考えられる。母神山古墳群には、6世紀から7世紀にかけての70基をこえる古墳が築かれている。そのなかで、6世紀前半のひさご塚古墳(長さ45mの前方後円墳)と、6世紀後半の複室構造の横穴式石室をもつ籬子塚古墳(径30m以上の円墳)は代表的な古墳であり、とくに籬子塚古墳からは、銀製冠帽飾り、環頭大刀柄頭2、ガラス製トンボ玉、馬具など豊富な副葬品が知られていて(註2)、この古墳群に「柄頭」をもつ古墳が含まれていても不自然ではないことがわかる。

なお、荻田元広氏によって調査された古墳群中の久米塚古墳(径21mほどの円墳)は、観音寺市による再調査で、胴張りの玄室と羨道は複室構造に通じる横穴式石室であることが確認された。当時の出土品のスケッチによれば、鉄刀、鉄鏃、鉄製轡、耳環、須恵器などあり、刀のなかに銀線巻きの柄と円頭柄頭らしき金具が見える。2点あり、「鍍金筒金付柄」、「鉄製鍍金筒金付鏃(鞘尻)」と注記されていて(註3)、この古墳にも飾り大刀が副葬されていたことがわかる。

つぎに、「鉄地金銀象嵌獣面紋大刀柄頭」について、いくつかの項目に分けて検討する。

1. 象嵌の技法

「鉄地金銀象嵌」とは、鉄の地金に金線と銀線を象嵌したもの。鉄製金具の表面に黒漆をかけ、それに鑿で紋様を線彫りし、そこに金線と銀線を埋め、研ぎ出している。ここでは毛彫り鑿を使用し、細く深い溝を彫るため、素材の削り屑のできる彫り方になる。それに比べて、5・6世紀の金工品によく見られる蹴り彫りは、削り屑のでない彫り方である(註4)。

2. 大刀の柄頭

「大刀柄頭」とは、内部が中空に作られた鑄造品のこの金具を、図3のように刀の柄木の上端にはめたもので、鬼面の口の孔はそれを釘で固定するための目釘孔である。金具の上部は、錆によってやや変形しているが、もとは弧形に作られた円頭柄頭である。

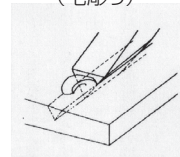
柄頭の平面は上辺を丸くつくる長方形で、横断面は隅切りの長方形になっている。この各面に象嵌紋様を施す。中心となる紋様は、表と裏面の鬼面紋である。ともに正面を向く大きな鬼面で、銀線のなかで目玉の金線が効果的に使われている。目の上の曲線を組み合わせた頭髪と、大きく開けた口、上あごの左右の牙が強調して表現されていて、獣面または鬼面と呼ばれる所以である。

円頭柄頭には、このほかにも象嵌紋様のあるものが知られている。それらの

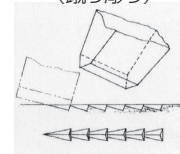


▲図1 獣面紋柄頭(町田章氏)

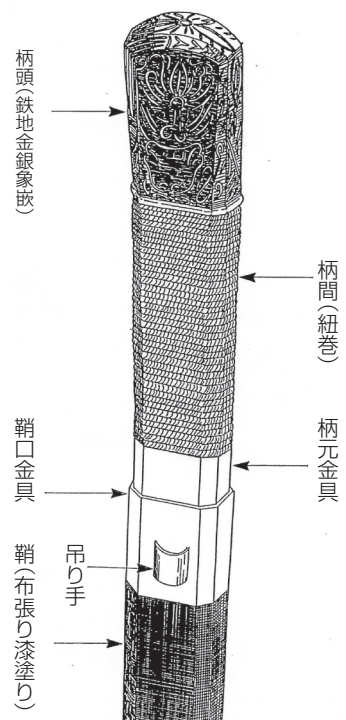
(毛彫り)



(蹴り彫り)



▲図2 線彫りの技法(鈴木勉氏)



▲図3 飾り大刀復元図(町田章氏)

なかでは、6世紀前半の奈良県星塚2号墳例は、金・銀象嵌で亀甲繋ぎ紋のなかに向かい合う鳥の紋様が識別でき、金具の断面形も本資料に近い。このほかは6世紀後半の例が中心で、平面・断面形ともに金具の頂部の肥大化がみられ、亀甲繋ぎ紋のなかの鳥や渦紋のくずれが目立つ。

町田章さんは、これらのうち6世紀前半の円頭大刀を大陸製品、6世紀後半のものは日本製品と区別し、金具の断面形と紋様のリアルな表現法で共通することから、本資料を星塚2号墳例に近い時期のものと位置づけた。さらに、その製作地について、象嵌紋様は「退化しているとはいえ、中国の鬼面紋にくらべてのことであって、日本製の竜紋などにくらべると格段に写実的である。このようなことから、韓国の加耶もしくは百済で製作されたものの」と考えている(註5)。

3. 獣面紋・鬼面紋

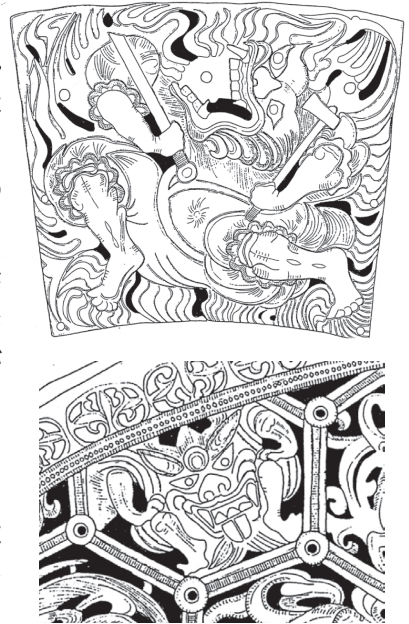
古墳時代の金工品で獣や鬼を表現した例には、つぎのようなものがある。

飾り大刀の獅噛環頭大刀は、6世紀後半代の古墳に出土例があり、いずれも獅子が環の下辺を噛む構図で、その頭部と大きな鼻、上あごの牙ともに本資料の象嵌紋様に通じる表現である。

また、奈良県藤ノ木古墳の金銅製鞍金具では、後輪中央の把手付金具の鬼神と、海金具の亀甲紋のなかに舌出し鬼が左右一体ずつ配置されている。ともに鬼面人身の姿で牙をむき出しにした鬼面は共通し、前者では両手に素環頭大刀と斧鉞を持ち、後者はともに大きな舌を出し、立て膝と胡座の姿を区別して表現する。この鞍金具の紋様には、中国に起源が求められるものが多く見られ、その製作工房に中国文化を理解できたデザイナーが属していたことがわかる。

飛鳥・奈良時代では、鬼面紋軒丸瓦と鬼瓦がある。前者は、新羅系の瓦とされていて、奈良県地光寺跡などの例が知られている。後者は、瓦屋根の大棟の両端など要所に見られ、厄除けの願いが込められていて、現代にも通じるなじみ深いものである。

中国考古学に詳しい林巳奈夫さんによれば、鬼神の類の一つの畏獣は、「雷、雷光、山嶽、川等、自然現象或いは顕著な自然を象徴する神々」であり、人間のような姿の頭部は、「大きな口に歯を露わにした醜悪な獣形の頭。頭や肩から逆立つ長い羽毛が生え、発散する力のエッセンスを表現している。」と指摘されている。ここまでの獣面紋・鬼面紋が、これに近いことがわかる。



▲図4 藤ノ木古墳 鞍金具の紋様

4. 魔よけの護身刀

この柄頭をつけた飾り大刀は、中国古代思想・神話のなかで生み出された獣面紋・鬼面紋が象嵌されていて、邪悪から守る魔よけを願った護身刀であったと考えられる。その紋様があまりくずれていないので、本来の意味を理解できたデザイナーと工人による作品であり、朝鮮半島製、または列島内であれば渡来工人が製作にあたったものだろう。

6世紀の列島内でも珍しい、このような優品の飾り大刀を入手したのは、朝鮮半島との交易に直接関与し、大和政権内の豪族とも通じた在地の有力者であったと考えられる。そして、さきに出土古墳の候補にあげた観音寺市母神山古墳群は、瀬戸内海をのぞむ丘陵上に位置していて、その被葬者たちは、瀬戸内を航行する船の安全を確保することや自らの航海術によって、社会的・経済的な地位を高めた集団であったと想定でき、この飾り大刀の保有者としての要件は満たしているだろう。

(奈良県・葛城市歴史博物館館長)

註1 鎌田郁雄・山地正夫1991「観音寺市・母神山古墳群出土の柄頭-栗井村某古墳出土の柄頭と久米塚の調査-」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』VI

註2 観音寺市誌増補改訂版編集委員会1985『観音寺市誌通史編』古墳時代の項

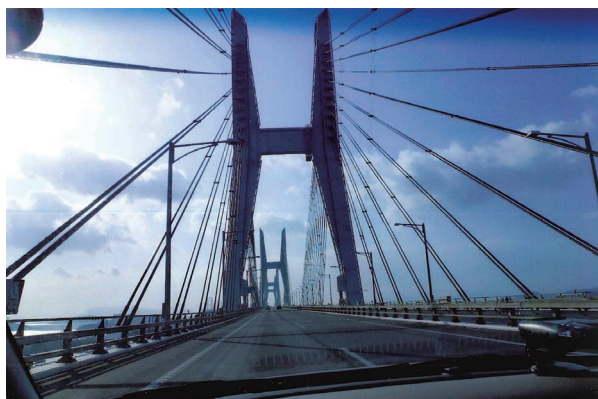
註3 註1に同じ。読みは郷土博物館の廣瀬永津子氏による。

註4 鈴木勉2004『ものづくりと日本文化』

註5 町田章1991「鬼面紋象嵌柄頭について」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』VI

定点観想 ③ 壮大なる国引き

榮 岩男



本四架橋のメインである中央道の瀬戸大橋は、紫雲丸事故(昭和30年5月11日)により、長らく滞っていた連絡橋建設計画が実現されることとなったものである。

当初トラス橋が予定されていた箇所が斜張橋に変更され、この橋の造形美・景観美を形成する。

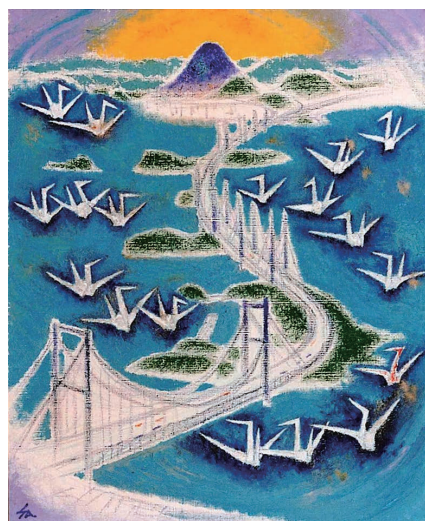
このようにして国立公園第1号の瀬戸内海にふさわしく、多様な美しい橋が連携

し、延長12.3kmの世界一の鉄道併用橋として完成した。

このことによって、離島であった四国が日本全島と結ばれ、生活文化に大変革を起こした。またいろいろな行事(金毘羅大芝居・阿波踊り・よさこい祭りなど)をスケジュール的に探訪できることとなったのである。

鎌田勝太郎氏の高遠なるプランニングと実行力によって社会教育館・武道館(指導者の中に植田平太郎範士<天覧試合出場>がおられる)建設など、日本一小さい県で、最後に分県された香川に目を見はるようなことをされ、またそれにふさわしい成果をあげ続けられた氏のお力は、敬服し、感謝申しあげるほかはない。

昭和天皇が攝政の宮であられた時、讃岐平野での陸軍



▲「華の陰に」(筆者画)
折鶴は建設工事殉難者を表す

大演習を統監され歌をお詠みになられたところが、現在も坂出市に「駒止町」として残されている。以来多くの宮様方が坂出の学校教育などご参観いただいていることも誠にありがたい。

人づくりを重く心にかけてられた勝太郎氏のご努力により、その影響が現在もなお生き生きと表れていることを強く思うことがある。



▲郷土博物館構内の摂政宮行啓記念碑(右)

平成26年1月30～31日、香川大学教育学部付属幼稚園、附属坂出小学校の第97回教育研究発表会を実施。小学校においては、北は北海道、南は鹿児島から約1800名の教師が参観。今後大きな反響を起すことが予想される。

浅い海を塩田に変え、街に変え、工場に変え、日本中を越えて広く結んだ壮大なる国引きとはいえないであろうか!!

(香川県教育会副会長・坂出市教育会会長)

郷土博物館のあゆみ

(2) 建物の建設へ

鎌田共済会の「栄誉」

大正11年(1922)11月20日に摂政宮裕仁皇太子の鎌田共済会へ行啓があったが、その後の11月23日、24日の両日は県下知名の士を招待して図書館内の皇太子御座所や陳列場を公開し、数百名の来観者があった。さらに27日から29日までの3日間是一般の人々への公開を行ない、驚くべきことに約2万人もの人々が押し寄せて構内は雑踏を極め、職員はその対応に追われた。もちろん当時の人々の皇室に対する並々ならぬ思いから起った事態であるが、開館して間もない白亜の図書館という近代施設への関心もあったようで、鎌田共済会としては社会教育施設としての図書館運営に手ごたえを感じたようである。

これら一連の喧騒が終わると出品物の返却が行われた。陳列された久米通賢、平賀源内、及び勤皇の志士に関する資料は140点ほどあり、久米通賢資料など会頭鎌田勝太郎の所蔵・保管になるもの以外は、県下の所蔵家から借用して出品されたものであった。返却の際には主催の香川県から「^{かしこ}畏クモ皇太子殿下ノ台覧ヲ賜ヘリ」という一文を記した「台覧証明書」及び感謝状が出品者に交付された。

翌大正12年5月の久^{くにのみや}邇宮一家訪問の際も同様に陳列品の多くは館外有志からの出品物であった。

さて、連年の皇族訪問は鎌田共済会にとってこのうえない栄光とされ、以後、鎌田共済会において常に思い起こされる栄誉となる。また翌大正12年からは皇太子行啓の11月20日に合わせて「皇太子殿下行啓記念史料展覧会」が毎年開催されるようになり、さらに大正14年1月に「光栄を不朽に伝えん」と東宮行啓記念碑が構内に建立される。

最初の展覧会

大正12年11月19・20日両日の「第一回行啓記念史料展覧会」は鎌田共済会で行われた初めての展覧会であった。場所は行啓の際と同じ図書館2階講堂である。展覧会を担当するのは図書館であったが、9月末に展覧会の立案をしたのは調査部主事の岡田唯吉であり、以後岡田の主導で展覧会準備が進められる。この当時、図書館の初代主事であった阿部由良は前年から病いにより長期欠勤しており、他に担当できる者はいなかった。また大正12年1月に岡田は図書館兼任を命じられてもいた。阿部は9月に退職し、その後任として10月26日に野田逸宮が図書館主事として赴任する。野田は岡田より11歳若い41歳で、県の教育畑を歩み、共済会へ転ずるまでは香川県木田郡視学の任にあった。野田はやがて図書館の柱石となって活躍するようになる。

この展覧会は郷土史料展覧会あるいは讃岐史料展覧会とも称されるように、ほとんどは香川県の歴史に関する史料の展示であった。「史料」とは歴史を考究するための素材で、具体的には記録・古文書などが主であるが、岡田の言う「史料」は現在のそれより幅広く、器物や考古遺物なども含んでいた。岡田は確かな「史料」に基づく研究が新しい歴史学だとし、「現今は史料蒐集の時代」とも述べているので、「史料展覧会」はまさに岡田唯吉の視点による展覧会であった。展示物は遺物・文書・記録・記念物・史籍・地図等・坂出地方現勢資料・参考品に大別され、139件を展示した。

2日間だけの展覧会であったが大盛況で、観覧者は2300人(一説には5000人)であり、岡田は「観覧者に本県史料に関する理解を与え、今後における史料研究と史料尊重の精神を涵養するのに大いに役立った」と述懐している。

この展示においても皇太子や久邇宮家来訪時の陳列品の場合と同様に県内の多数の所蔵者から資料を借りて展示し、終わるとただちに返却するというやり方をとった。これは2回目以降も続く。このように、館外の多数の所蔵者から借りて展示をするという方式は、共済会としてまだ自前の所蔵品が質量ともに十分でないことからきているが、県内の隠れた史料を発掘することにもなった。

「御成婚記念館」

大正12年9月1日の関東大震災によって延期された^{ひろりと}裕仁皇太子と^{ながこ}久邇宮良子女王の婚儀は、同年11月頃になると、翌大正13年1月末か2月初めに行われるだろうという観測が新聞に載るようになる。それとともに自治体や学校、諸団体等での成婚記念行事や記念事業の計画が続々と報じられはじめる。

鎌田共済会は皇太子行啓、良子女王台覧を会にとっての最大の誇りとしていたから、何らかの成婚記念事業の実施は当然ともいえることだった。しかし意外にもその動きは大正12年の内には見られない。

その頃、鎌田共済会では上記の「第一回行啓記念史料展覧会」の準備と実施に余念が無かった。それが終わると会頭鎌田勝太郎は12月に帝国議会が開かれるため上京し、帰郷したのは12月末日だったらしい。そのような事情が記念事業の開始を遅らせたのかもしれない。ただ勝太郎は記念事業をどうすべきか考えをめぐらし、しだいに具体化していたとみられる。それは「東宮殿下御成婚記念館」なる建物を建てることであり、その建物の機能としては郷土博物館であった。皇室の慶事を記念して

9

鉄地金銀象嵌獣面紋大刀柄頭と荻田元広

「鉄地金銀象嵌獣面紋大刀柄頭」(表紙写真参照)は大正14年(1925)1月鎌田共済会図書館に荻田ミヤ子氏によって寄贈された考古資料の中から見いだされたものである。同氏は亡夫である荻田元広所蔵の考古資料の他、論文原稿、研究ノート他多量の貴重な蔵書を当館に寄贈された。ここでは荻田元広について、また荻田と柄頭とのかかわりについて簡略に紹介する。

荻田元広は明治10年(1877)、香川県豊田郡本ノ大村(現観音寺市本大町)に生まれた。金刀比羅宮が設立した中学校である琴平の明道学校に学んだ後、香川県師範学校に入学、明治30年(1897)に卒業した。その後、一ノ谷小学校に勤務しながら文部省検定試験に合格、明治36年(1903)から香川県師範学校教諭となり、国語、漢文、歴史を担当する。荻田は生徒に長く慕われ、尊敬された優秀な教育者であると同時に、すぐれた歴史学、考古学、民俗学の研究者であった。これはその教えを受けた人々の言のみならず残された著作、蔵書の内容、また、柳田國男や喜田貞吉等当時一流の学者との交流を通じて窺われる。明治41年(1908)、病氣療養のため職を辞し、大正7年(1918)に42歳で亡くなった。

上記の柄頭は昭和62年(1987)に瀬戸内海歴史民俗資料館によって精査されるまで60年余り注目されることもなく当館に収蔵されてきた。柄頭を入れた木箱には「鐵製剣頭

香川縣栗井村某古墳ヨリ出デシモノ 明治卅七年九月日」と書かれた荻田の手書きと見られる紙片が入っている。それ以外の柄頭に関する情報は収蔵台帳等にも残っておらず、出土した古墳の名称や所有に至った経緯は今のところ不明である。ただ、残された調査記録を見ると、明治37年9月には三豊郡内遺跡の踏査をしていることから、その際に採集したものではないかと推測することもできる。荻田は翌38年(1905)1月に久米塚古墳をはじめ幾つかの母神山古墳群(現観音寺市)の古墳の調査を実施し、また同年2月には考古学会に入会する等、そのころから本格的に考古学に取り組んでいったと思われる。

当館にある荻田旧蔵考古資料を見ると、資料名称、収集年月日、出土地等の情報が今日と同様に付けられている。また、手書きされた調査・踏査記録には緻密な観察の記述や、大まかではあっても要点を押さえた図面類を見ることができ。残された多くのものによって、明治30年代という考古学が学問として誕生間もない時期であるが、すでに香川県にも優れた研究者が育ち始めていたことを知ることができるのではなかろうか。

INFORMATION

■ 鎌田共済会郷土博物館第3回公開講座

「『讃岐偉人久米栄左衛門翁』
と岡田唯吉」

平成26年4月26日(土) 13:30~15:00
(開場13:00)

会場：鎌田共済会郷土博物館2階講堂

講師：加藤 優(館長)

〔参加無料、締切4月19日、先着40名〕

電話・FAXかHPのフォームからお申込み下さい。

電話：0877-46-2275

FAX：0877-45-0035

H P：http://www.kamahaku.jp/

■ 次回予告(予定) 第4回公開講座

平成26年10月25日(土)

(詳細はHPでお知らせします)

鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

開館時間：午前9時30分～午後4時30分(入館は4時まで)

休館日：月曜日／祝祭日

夏季特別(8月13日～15日)

年末年始(12月29日～1月4日)

入館料：無料

参考文献

- 一ノ谷公民館 「いちのたに」6号 1971
- 荻田元広 「37 埴輪アル古墳ノ発見」
(讃岐史料 雑之 一所収)
- 日本考古学会編 『考古界 第四篇第拾號』 1984
(廣瀬 永津子)